

# Voice of Design

2018年3月31日発行

最終号

日本デザイン機構  
Japan Institute of Design

東京都豊島区高田3-30-14山愛ビル2F 〒171-0033  
San Ai Bldg. 2F 3-30-14 Takada Toshima-ku Tokyo 171-0033 Japan  
E-mail: info\_jd@voice-of-design.com

特集

23年の活動を終えて

Special Issue

Looking back upon the 23 Years of JD in Action



## 目次

ご挨拶	2
「榮久庵さんの遺言」	水野誠一
「日本デザイン機構の果たしてきたこと」	伊坂正人
日本デザイン機構の解散について	3
活動	4
日本デザイン機構23年の歩み	10
日本デザイン機構活動歴史ダイアグラム	12
寄稿	14
おわりに	22
「新たな活動ステージへの移行にあたって」	佐々木歳郎
編集後記	23

## Contents

Greetings	2
"Eku-an-san's Last Will"	Seichi MIZUNO
"What Japan Institute of Design has Achieved"	Masato ISAKA
On the Dissolution of the Japan Institute of Design	3
Activities	4
Japan Institute of Design: 23 Years of Work	10
Diagram of the Activity History of the Japan Institute of Design	12
Contributions	14
On Closing	22
"Moving into a New Stage of Activity"	Toshio SASAKI
Editor's Note	23

## ご挨拶

### 榮久庵さんの遺言



#### 水野誠一

日本デザイン機構 会長  
インスティテュート・オブ・マーケティング・アーキテクチャ 代表取締役

手許に榮久庵憲司さんの『デザインに人生を賭ける』と『袈裟とデザイン』という2冊の本がある。デザインを一生の伴侶として生きてこられた榮久庵さんの遺言ともいえる本たちだ。

長年インダストリアルデザインの最前線に身を置いてこられた榮久庵さんが、晩年、「道具」の概念を通じて、またご自身の出自でもある「仏教」の概念を通じて、「デザインの心は、布施の心」という悟りの下で「宇宙曼荼羅」を描いてこられた理由がよく理解できる。

その榮久庵さんが1995年に創設したのが「日本デザイン機構」だ。

私が西武百貨店を退職した直後だったと思うが、ある日榮久庵さんが私の事務所にいらして、新しい団体を立ち上げるから参加しないかとお誘いいただいたのが始まりだった。私はデザイン界には全くの門外漢であり、何の役にも立てないと申し上げたのだが、榮久庵さんは、「デザイナーの職能団体を作る気は全くないから、あなたのような外界の人が必要なのだ」とおっしゃった。当時私は慶應義塾大学でソーシャルマーケティングの研究を始めようとしていた矢先だったので、ソーシャルデザインのような広義の概念で良いのなら是非参加させていただきたいとお答えした。それ以来、ソーシャルデザイン、さらにその後は、視野をミクロからマクロにまで拡大したホロデザインという概念を提唱して、活動を続けさせていただいた。

発足以来、榮久庵さんは会長職を務めてこられたが、2006年から新たに設けられた理事長職を私に託された。今振り返ってみると、私はその期待に十分にこたえられたとは思えない。しかしシンボルとしての榮久庵さんがご健在の限りは、何とか運営してくることができた。

その榮久庵さんが、2015年に突然逝かれてしまったのだ。同年、その追悼ともいえる『オピニオンズ「榮久庵憲司で切る！ソーシャル

デザインの未来を拓く』というオマージュを開催したが、今後も活動を継続すべきか否かを、GKデザイングループのメンバーも含む幹部一同で検討してきた。

榮久庵さんがこの「日本デザイン機構」をつくられた目的は、我々の想像以上に「未来社会のデザイン」という「コトのデザイン」をイメージされていたのではないと思う。それが、ご自身が関わってきた「モノのデザイン」の集大成ともいえる「道具学会」などと大きく異なる点ではないだろうか。ならば一層、残された者の責務は大きいのだが、法人会員などの負担の大きさも考慮して、巨星を失った「日本デザイン機構」は一旦幕を引かせていただくことになった。

しかしながら、榮久庵さんが私たちに託した「未来社会のデザイン」までを忘れてはならない。

そこで、まだ試案ながら、今後有志で「未来社会のデザイン」をテーマに取り組む小さなベンチャー組織でも作ることができればと夢想している。しかも単に研究や提言だけではなく、実現を睨んだ事業にまで育てていければなお良い。それゆえにハードルも高いが、世代を超えたメンバーが集まって再挑戦するにはふさわしいテーマだろう。

これを通じて、榮久庵さんと「日本デザイン機構」の「声」ともいえる「Voice of Design」を残すことができればと願っている。

### 日本デザイン機構の果たしてきたこと



#### 伊坂正人

日本デザイン機構 理事長  
静岡文化芸術大学 名誉教授

日本デザイン機構は1995年の設立以来、事務局を3度移転させてきた。設立準備段階はGKデザイン機構の中に置いたが、設立年の12月に、当初法人会員であった都内の竹芝にあった積水樹脂の中に置かせていただいた。この初動の2年間は設立主旨にある学際的な横切りテーマを探索する時期であった。

## Greetings

### Ekuan-san's Last Will

Seiichi MIZUNO, JD Chairperson / President, Institute of Marketing Architecture Co., Ltd.

I have two books written by Kenji Ekuan, "Design ni Jinsei wo Kakeru (Devoting MyLife to Design)" and "Kesa to Design (Buddhist Priest's Stole and Design)". These books are like the last will and testament of Ekuan who lived his whole life in partnership with design.

It is clear to me that Ekuan's foundation in Buddhism served as the basis for his development of the concept of "dougou." Additionally, his realization that "the mind of design is the mind of making an offering" also stemmed from his Buddhist beliefs. I can understand the reason why he drew his "Cosmic Mandala" in his latter days after having been long at the forefront of industrial design. Ekuan founded the "Japan Institute of Design" in 1995. He invited me

to join the organization. I responded I would like to if design would be considered in a broader sense such as social design. As a member I advocated the concepts of Social Design and later Holo Design covering microscopic to macroscopic design.

When Ekuan established the Japan Institute of Design, he must have had a grand vision of the "design of immaterial things," or the "design of future society."

We should not forget the "design of future society" that Ekuan has left with us. I am now dreaming that we could organize a venture group with interested people to specifically address this subject.

### What Japan Institute of Design has Achieved

Masato ISAKA, JD President / Professor Emeritus, Faculty of Design, Shizuoka University of Art and Culture

Japan Institute of Design was established with its secretariat in Tokyo Tachibana in 1995.

最初の事業は1995年10月にパレスホテルで開催したオープンシンポジウム「日本のデザインを考える」だった。このシンポジウムの記録と設立にあたっての理事からのメッセージを掲載した機関誌『VOICE OF DESIGN』の創刊号を発行した。機関誌は海外への配布も考えて要約ではあるが英文も表記することにし、以来本最終号まで続けてきた。

1997年3月に1995年の阪神・淡路大震災の1年後ということで、JDフォーラム「災害からデザインを考える」を国際文化会館で開催した。こうした社会性を持ったテーマの総称を「ソーシャルデザイン」とし、同年5月に14のテーブルテーマを置いたマルチテーマフォーラム「ソーシャルデザイン」を東京国際フォーラムで開催した。さらに6月にJDシンポジウム「デザインの国際貢献—難民のための居住環境」という国際シンポジウムをUNHCRから専門家を招聘して開催した。こうした今まであまりデザインの世界ではテーマとなっていなかった課題を取り上げてきた。

また、日本デザイン機構の前身となる「日本のデザインを考える会」では、3回の国内および国際シンポジウムを通して専門を超えた横切りの議論の中で多くのデザイン課題を抽出してきた。この4回のシンポジウムの講演内容を再構成して、日本デザイン機構編『デザインの未来像—地球時代の日本を考える』を晶文社から出版した。

「ソーシャルデザイン」をキーワードに個別テーマを設定し、フォーラム・シンポジウム、出版、機関誌発行などの事業を通して世に訴えるという日本デザイン機構の性格付けができた。

1998年より2000年まで虎ノ門に独立した事務局を置く。この期間にソーシャルデザインを解題するテーマとして循環型社会、消費社会、クルマ社会、観光などを取り上げ議論を深めた。

そして2000年以降、事務局を再びGKデザイン機構の中に置き、個別テーマの議論を深めた結果を『クルマ社会のり・デザイナー—近未来モビリティへの提言』2004年、『消費社会のり・デザイナー—豊かさとは何か』2009年、『くらしとデザインの本1、2、3』2009年、『マイナスのデザイン』2011年と出版に展開してきた。

この3つのステージを見ると、包括的な視点からテーマを発掘し、それを世に問い掛け、解決の糸口を示すという日本デザイン機構の役割は果たせたのではないかと思う。こうした展開が新たな動きとなることを期待する。

## 日本デザイン機構の解散について

日本デザイン機構は、複雑化する社会において一方で諸専門が細分化するなかで「デザインを分母として、技術・社会・人文・自然科学などの学際的連携を通じ、地球時代の課題に取り組む」ことを目標に1995年に設立しました。一昨年、故人となられた榮久庵憲司氏の呼びかけに応じて、故菊竹清訓氏、故栗津潔氏そして現日本デザイン機構会長水野誠一氏など専門を超えた人たちが集まり、会設立にいたりしました。以来23年間「デザインで諸問題を切る」また「諸問題をデザイン課題とする」活動を「ソーシャルデザイン」という視点から課題発掘し、シンポジウムやフォーラムなどを開催してきました。また、その成果を会報『VOICE OF DESIGN』や出版物などを通して世に問うてきました。

こうした活動のなかで、「クルマ社会」「水環境」「消費社会」「災害」など具体的なテーマを深掘りし、様々なかたちで提言をしてきました。いまデザインは、社会のための思考であるという概念は定着してきました。これからはこうしたテーマをより具体的なデザイン活動に展開することが求められます。

こうした状況のなかで、日本デザイン機構の運動体としての役割を終えたという認識のもと、本会を解散することとなりました。23年間の活動を支えた会員諸氏、また、その活動を支援していただいた方々に感謝と御礼を申し上げます。また、本会の理念を引き継ぎ、新たな展開を志す人たちへの改めてのご支援をお願いいたします。

The first program was the inaugural symposium "Considering Design in Japan" held in Tokyo in October 1995. The first issue of Voice of Design was published containing the report of the symposium and messages by the board members. Considering overseas distribution, the articles in the journal had summaries in English.

In the aftermath of the Hanshin Awaji Great Earthquake in 1995, the JD Forum "Considering Design from Disaster" was held in 1997. Subjects with social significance were collectively named Social Design. In 1997, we organized "Social Design", a multi-table forum with 14 table subjects.

In the field of publishing, the Japan Institute of Design published "Future Picture of Design – Japan in a Global Age" compiling lectures given at symposiums by its antecedent, Society to Consider Design in Japan.

Under the grand subject of Social Design, different timely subjects were chosen, and JD as a design advocacy and an organization for

movement was established, and its views were publicized through forums, symposiums, publications and the journal.

JD has played a vital role in identifying issues from a comprehensive perspective, presenting them to society while showing hints for solution. I expect that such a process will lead to a new action.

## On the Dissolution of the Japan Institute of Design

In 1995, the Japan Institute of Design (JD) was established. For 23 years since its inception, JD has identified social issues to be addressed under the perspective of Social Design.

During the years, the concept that design needs to consider society has taken root.

However, considering that the role of the organization to be a movement and a catalyst for change has been fully performed, we have decided that the organization should be dissolved.



## 活動1

## 【フォーラム・シンポジウム・ワークショップなど】

日本デザイン機構の設立をアピールするオープンシンポジウム「日本のデザインを考える」(1995年10月、パレスホテル)の開催を皮切りに、災害、教育、都市などの個別テーマでフォーラムを開催してきた。会の活動の軸が「ソーシャルデザイン」となって多数のテーブルテーマによるマルチテーマフォーラムや一人の講師と参加者が深い議論をするサロン、複数の講師からの話題をもとに会場全体で討議するラウンドテーブルやオピニオンズ、特定テーマのワークショップを連続して行うDesign DOOなど、様々な形態での討議の場をつくり課題の深堀りを行ってきた。さらにUNHCRやDesign for the Worldからの講師を招聘した国際シンポジウムなども開催し、グローバルな場づくりも努めてきた。

## Activities 1

## Forums, Symposiums, Workshops, etc.

With the inaugural symposium, "Considering Design in Japan" (Palace Hotel, Tokyo, October 1995) announcing the establishment of Japan Institute of Design (JD), various forums on such themes as disaster, education, and cities have followed. After determining that "Social Design" would be the main subject for its activities, JD has organized various discussion meetings to study different themes in depth. Among these were multi-theme forums, one lecturer talk salons with the opportunity for the audience and lecturer to exchange views, round-table discussions, Opinions, Design DOO, a series of workshops on specific subjects such as motorized society, consumption, and new energy society. In addition, with an eye to creating a place for global discussions on these themes, international symposiums to discuss global issues with lecturers from the UN Refugee Agency (UNHCR) and Design for the World have been held.

## シンポジウム 1995～

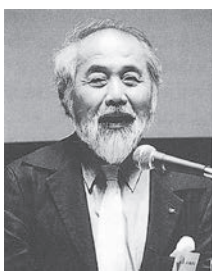


オープンシンポジウム オープンシンポジウム「日本のデザインを考える」1995年10月30日 パレスホテル

## フォーラム 1996～



JDフォーラム「災害からデザインを考える」1996年3月12日 国際文化会館



マルチテーマフォーラム「ソーシャルデザイン」1996年5月27日 東京国際フォーラム

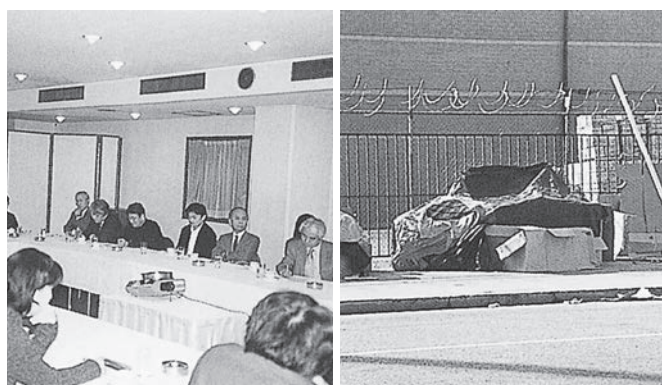


## 国際シンポジウム 1995～



国際シンポジウム「Design for the World'99東京」 1999年7月5日、6日 日本海運倶楽部

## サロン 1996～



JDサロン「大会における略式居住ー ホームレスとそのデザイン」  
1999年2月26日 国際文化会館

## トークサロン 2011～



Voice of Designトークサロン「行動する建築家・石山修武さんと2時間」  
2011年11月17日 アルカディア市ヶ谷私学会館

## ラウンドテーブル 2013～



ラウンドテーブル Voice of Design フォーラム オピニオンズ「今あらためて問う「デザインとは」」  
2013年6月12日 日仏会館

## Design DOO 2014～



Design DOO「歩行者以上・自動車未満の再定義ーヒューマンモードを考える(全3回)」  
2015年9月17日、10月14日、11月2日 大井町駅周辺、東京ビッグサイト、他

## 活動2

### 【機関誌・Web】

設立以来、日本デザイン機構の活動を外部にアピールするメディアとして、機関誌『VOICE OF DESIGN』を和文と要約英文を掲載した形式で発行してきた。創刊は1996年1月発行のVol.1で、オープンシンポジウム「日本のデザインを考える」(1995年10月、パレスホテル)の抄録と理事からの提案で構成。毎号特集テーマを決め、フォーラム・シンポジウムなどの抄録や理事や会員からのメッセージ、さらには編集委員の取材などで構成してきた。

ペーパーメディアに加え、ホームページやFacebookを開設し、双方向のコミュニケーションを試みてきた。

## Activities 2

### Printed Journal and Online Communication

Since its inauguration, JD has issued the journal "Voice of Design" to publicize its activities. It has been published in full in Japanese with abridged English texts. The first issue, in January 1996, covered the summary of the inaugural symposium "Considering Design in Japan" (Palace Hotel, Tokyo, October 1995) and proposals from the board of directors. Every issue has a focus theme, and contains summary reports of forums, symposiums, messages from board members and the general membership, as well as interviews conducted by the editorial staff were included.

In addition to the paper medium, JD opened its website and Facebook pages to enable interactive communication with readers.

## 機関誌

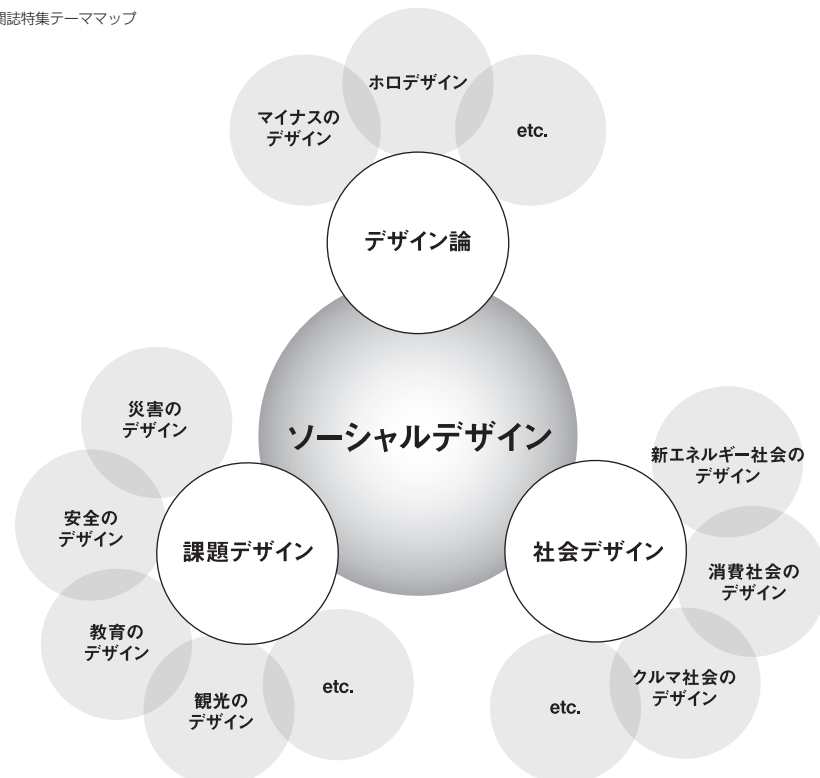


創刊号 Vol.1 VOICE OF DESIGN 1996年1月25日発行



Vol.5-2 国際シンポジウム「Design for the World'99東京」記録号 1999年9月15日発行

## 機関誌特集テーママップ

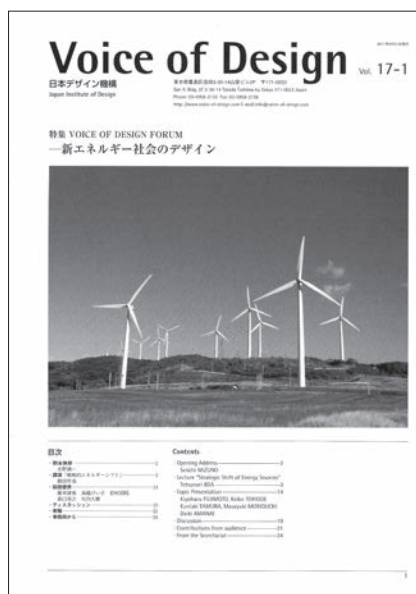


機関誌で特集してきたテーマは、災害・安全・教育・観光そしてクルマ社会・消費社会・新エネルギー社会さらにマイナスのデザイン・ホロデザインなど多岐にわたる。





新たなロゴタイプ号 Vol.7-1 2001年7月27日発行



Vol.17-1 フォーラム：新エネルギー社会のデザイン 2011年8月31日発行



Vol.19-1トークサロン5：「今」の共有 都市の文化化にこそ、未来がある 2013年11月20日発行

## ホームページ、Facebook



初代のホームページ



2009年にリニューアル。活動名称に「Voice of Design」を掲げた。水野理事長(当時)による「ホロデザイン宣言」を掲載。



現在のホームページ



Facebook

## 活動3 【出版】

出版は日本デザイン機構の事業の大きな柱の一つとなっている。一つのテーマでフォーラムなどを重ねて得られた提言集としてまとめたものである。前身となる「日本のデザインを考える会」で開催した国内シンポジウムと国際シンポジウムの結果を編集した『デザインの未来像—地球時代の日本を考える』（1996年4月 晶文社）の出版に始まり、以下の出版成果を出した。

『クルマ社会のリ・デザイン—近未来モビリティへの提言』（2004年7月 鹿島出版会）  
『消費社会のリ・デザイン—豊かさとは何か』（2009年2月 大学教育出版）  
『くらしとデザインの本 1—デザインのいろいろ』  
『くらしとデザインの本 2—デザインの現場から』  
『くらしとデザインの本 3—これからのデザイン』（2009年4月 岩崎書店）  
『マイナスのデザイン』（2011年4月 ジャパンライフデザインシステムズ）



## Activities 3 Publications

Publishing is one of the pillars of Japan Design's activities. JD has compiled the reports of forums and other meetings on specific themes, and collected proposals made in these meetings. Beginning with "Future Picture of Design – Japan in a Global Age" (May, Shobunsha), a collection of the reports of symposiums held in Japan and abroad in the name of JD's antecedent "Society to Consider Design in Japan," JD published the following books:

- "Re-Designing the Motorized Society – Proposals for Mobility in the Near Future" (Kajima Publishing, July 2004).
- "Re-Designing the Consumption Society – What is richness in life" (Daigaku Kyoiku Shuppan, January 2009).
- "Book of Living and Design 1 – Various Designs" "Book of Living and Design 2 – From Designing Scenes," "Book of Living and Design 3 – Design from Now" (Iwasaki Shoten, 2009).
- "Design of Deduction" (Life Design Books, April 2011).



## デザインの未来像 —地球時代の日本を考える 日本デザイン機構 編 晶文社 刊

戦後半世紀、自動車や電器製品から住宅まで、デザインは日本人の生活に広く深く浸透してきた。しかしいま、環境、都市、高齢化など地球規模の課題にどう取り組むべきか、その方向を見失っているようにみえる。最尖端で活躍するデザイナーや建築家のみならず、研究者や実務家、社会学者や歴史学者をもまきこみ、新たなデザイン像を構築、日本の社会と文化に向けられた真摯かつ貴重な提言集。  
1996年4月発行、315ページ

目次：

- 1 日本のデザインを考える
- 2 近代から現代へ
- 3 情報化時代のデザイン
- 4 拡大する人工物の世界とデザインの役割
- 5 デザインと生活文化の近未来
- 6 都市デザインと社会システム
- 7 デザインと経済
- 8 デザインと日本
- 9 地球時代のモノ文化
- 10 討論 新しい社会像とデザイン像

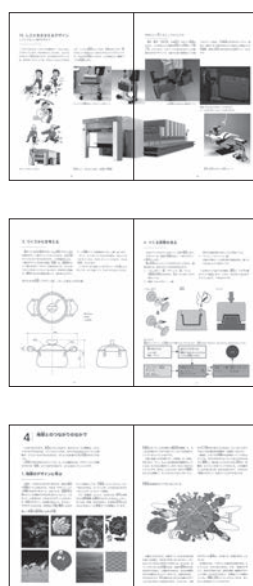
## クルマ社会のリ・デザイン —近未来モビリティへの提言 日本デザイン機構 編 鹿島出版会 刊

20世紀を駆けぬけ、都市、産業、生活文化を大きく変えた自動車、その自動車がつくったクルマ社会。このクルマ社会を、サステイナブル都市、シニア社会、次世代交通システム、ツーリズムなどの視点から問い直し、いかにリ・デザインするか？モビリティのあり方を問い直し、未来へのシナリオを描く提言33本。  
2004年7月発行、219ページ

目次：

- 1章クルマ社会の光と陰
- 2章クルマ社会の広がり
- 3章クルマ社会の成熟
- 4章クルマ社会のリ・デザイン





## くらしとデザインの本(全3巻)

日本デザイン機構 編 岩崎書店 刊

デザインとはなんでしょう。装飾や車、建設など、私たちのまわりにはたくさんのデザインされたものがあり、そこには多くの人たちがかわり、「生活に必要なものを、美しく整えて充たして」いる。小学校高学年から一般まで幅広い年代を対象に、さまざまなデザインの基本から、今とこれからのデザインを考えた本。

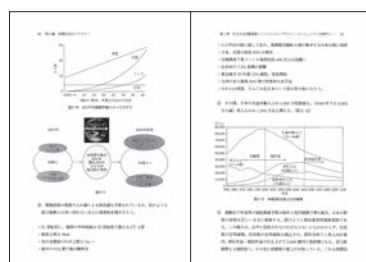
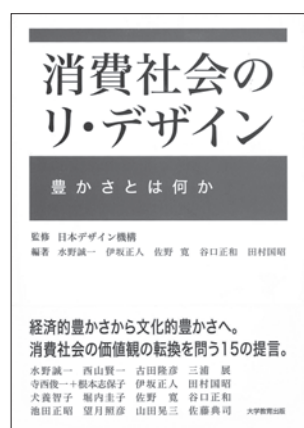
2009年4月発行、56～66ページ

『1巻 デザインのいろいろ』

『2巻 デザインの現場から』

『3巻 これからのデザイン』

第11回学校図書館出版賞



## 消費社会のリ・デザイン —豊かさとは何か—

日本デザイン機構 編 大学教育出版 刊

従来、「消費」は経済・経営の分野で、「消費社会」は社会学の分野で取り上げられてきた。本書では、消費社会を文化から捉え直し、豊かな文化を求める消費のありよう、消費の背景にある価値観の転換を事例を交えながら考察し、新たなデザイン課題を求める。

2009年2月発行、234ページ

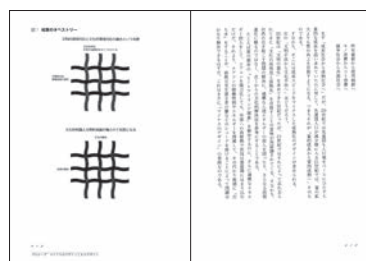
目次：

第1編 消費社会のコペルニクスの転換

第2編 消費社会のリテラシー

第3編 小さな単位の消費社会

第4編 消費社会のリ・デザイン（座談）



## マイナスのデザイン

日本デザイン機構 編 ジャパンライフデザインシステムズ 刊

余剰を排し、そぎ落とされた洗練へ。引き算の発想で本質を炙り出す。オーバーデザインにストップをかけ、デザインの転換を果たす。21世紀の公共デザインのあり方を、豊富な事例と写真で提示するオムニバス都市論。

2011年4月発行、264ページ

目次：

プロローグ マイナスのデザインとホロデザイン

第1章 [美学] 公共デザインの美を問う

第2章 [文化] 関係性の価値と社会デザイン

第3章 [建築] 都市景観の未来-景観デザインが繁栄を決める

第4章 [心身] 『Kosmosの音楽』を奏でる都市へ向けて

第5章 [交通] 無駄のない道が安全快適を生む

第6章 [観光] ビジット・デザインing発想

第7章 [緑] 都市における緑のあり方

第8章 [色彩] 響きあう景色

エピローグ パブリック・デザイン・マネジメント

## 日本デザイン機構 23年の歩み

### ソーシャルデザインという宇宙に向けて

活動を開始した1995年から2018年までの23年間のJD活動を、おおきく5つのフェーズに分けてみた。「運動体」としての歴史概観である。その実態はあたかも「宇宙船JD号」が「ソーシャルデザイン」という宇宙に向け、勢いよく発進し、颯爽と上昇を続けながらも巡航飛行へと体勢を移し、無事地球帰還に至る歴史ものがたりと見ることができる。この宇宙の解明は、ソーシャルデザインからの提言(Voice of Design)という使命によって、いくつかの成果を上げることができた。が、宇宙船の燃料には限りがあった。いつかは帰還せねばならなかった。そしてこの飛行の成果を踏まえ、ソーシャルデザインの新たなステージがふたたびいま始まろうとしている。

### Japan Institute of Design: 23 Years of Work

#### Toward the Universe called Social Design

We examined the 23 years of the organization's activities, from 1995 to 2018, and divided them into five phases. It is a historic overview of the organization as an organization for movement. It is like a Spaceship JD which was forcibly launched toward the universe called "Social Design," that continued to rise jauntily until it reached cruising altitude, and then safely returned to the earth. Some results were achieved as to the universe of social designs by proposals made in the Voice of Design, however, the spaceship's fuel supply was limited. It had to return to the earth at some point. But based on the findings so far, a new stage of social design is going to begin now.

日本デザイン機構の23年の歩み／歴史概観

1995



Phase1

2000



Phase2

打上期 Launching

上昇期 Rising

95	96	97	98	99	00	01	02	03	04
----	----	----	----	----	----	----	----	----	----

1

### ソーシャルデザインという 宇宙に向けて

*Toward the Universe of Social Design.*

バブル経済崩壊後の影響が続く1990年代後半、激動する社会にあって、デザインは今何を為すべきか。デザイン界の閉塞状況を憂う有志の会「日本のデザインを考える会」を母体に、1995年「日本デザイン機構」が設立された。

そのスローガンは「デザインを分母として、技術・社会・人文・自然科学などの学際的連携を通じ、地球時代の課題に取り組む」こと。すなわち「デザインで諸問題を切る」「諸問題をデザイン課題とする」事であった。従って、山積する課題群を広く世に示すとともに「ソーシャル・デザイン」をキーワードに、そのメッセージは「デザインの宇宙船」として力強く打上げられたのである。

2

### Voice of Designを基軸に 具体的テーマへの提言

*Proposals on Specific Subjects  
in the Voice of Design and others.*

21世紀を目の前にして、その活発化した動きは世界にも広がり、2000年「世界デザイン機構 (Design for the World)」が、スペインのバルセロナ市に創立される。それと相まって、多岐にわたる分野からの賛同者を得て、さまざまな課題をテーマに、マルチテーマ・フォーラムや国際シンポジウム、そしてワークショップ等が活発に開催される。「クルマ社会」「水環境」「消費社会」「災害」など具体的なテーマを深堀し、多彩なプロジェクトの遂行や、未来への諸提言・提案が為された。それらは、機関誌「Voice of Design (デザインの声)」を基軸に、各種書籍の出版やWEB公開等を通じて、広く社会に向けて、発信されたのであった。





## 日本デザイン機構 活動歴史ダイアグラム

### 活動実績とソーシャルデザインからの提言

この年表は、上段に日本社会のできごと、2005年ごろから始まるソーシャルデザインの動き、中段にJDの活動実態、下段には発刊した書籍等を記したJDの活動ダイアグラムである。

バブル経済の崩壊、阪神淡路の大震災、サリン事件といった社会の不安要因を抱えた1995年、日本デザイン機構はその活動をスタートした。これからの社会が課題とするであろうテーマを、国際的な視野から討議を重ね、97年には「ソーシャルデザイン」を宣言した。フォーラム、シンポジウムでの提言から機関誌『VOICE OF DESIGN』や書籍発刊を通して積極的にメッセージを発した。失われた10年が過ぎたころから、ようやく社会は「ソーシャルデザイン」を捉えはじめる。スタンフォード大学d.スクールからはじまるデザイン思考の進展と呼応しながら、巷では「ソーシャルデザイン」は市民参加型ブームを迎える。JDは08年に「ホロデザイン」宣言をもってその存在意義を再度確認し、活動容態はより多くの人との公開討論型にシフトしていった。そして企業の社会的責任、国連の持続可能な開発目標(SDGs)などの指針が示される時代を迎えるに至った。

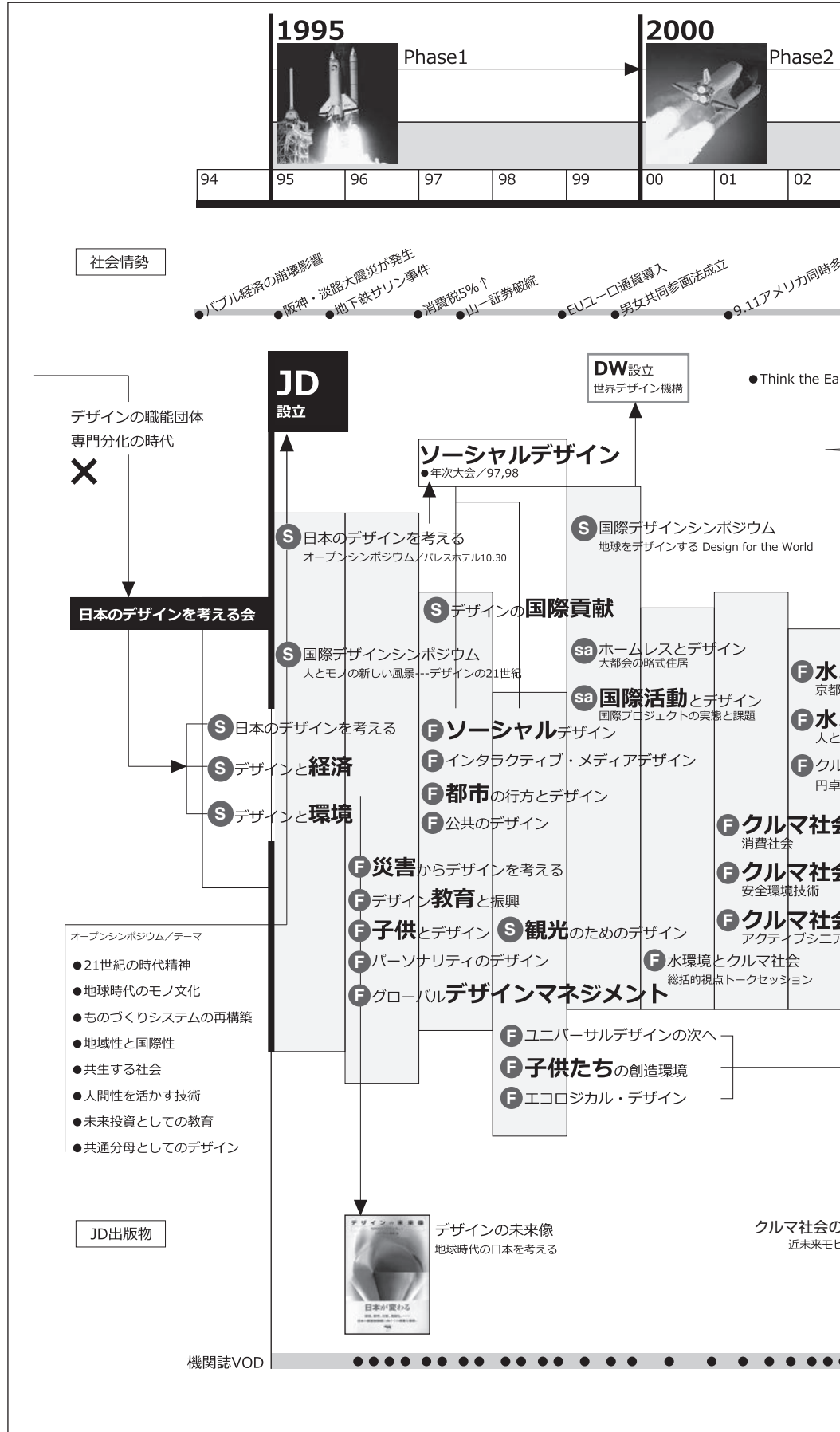
### Diagram of the Activity History of the Japan Institute of Design

#### Design Achievements and Proposals from Social Design Activities

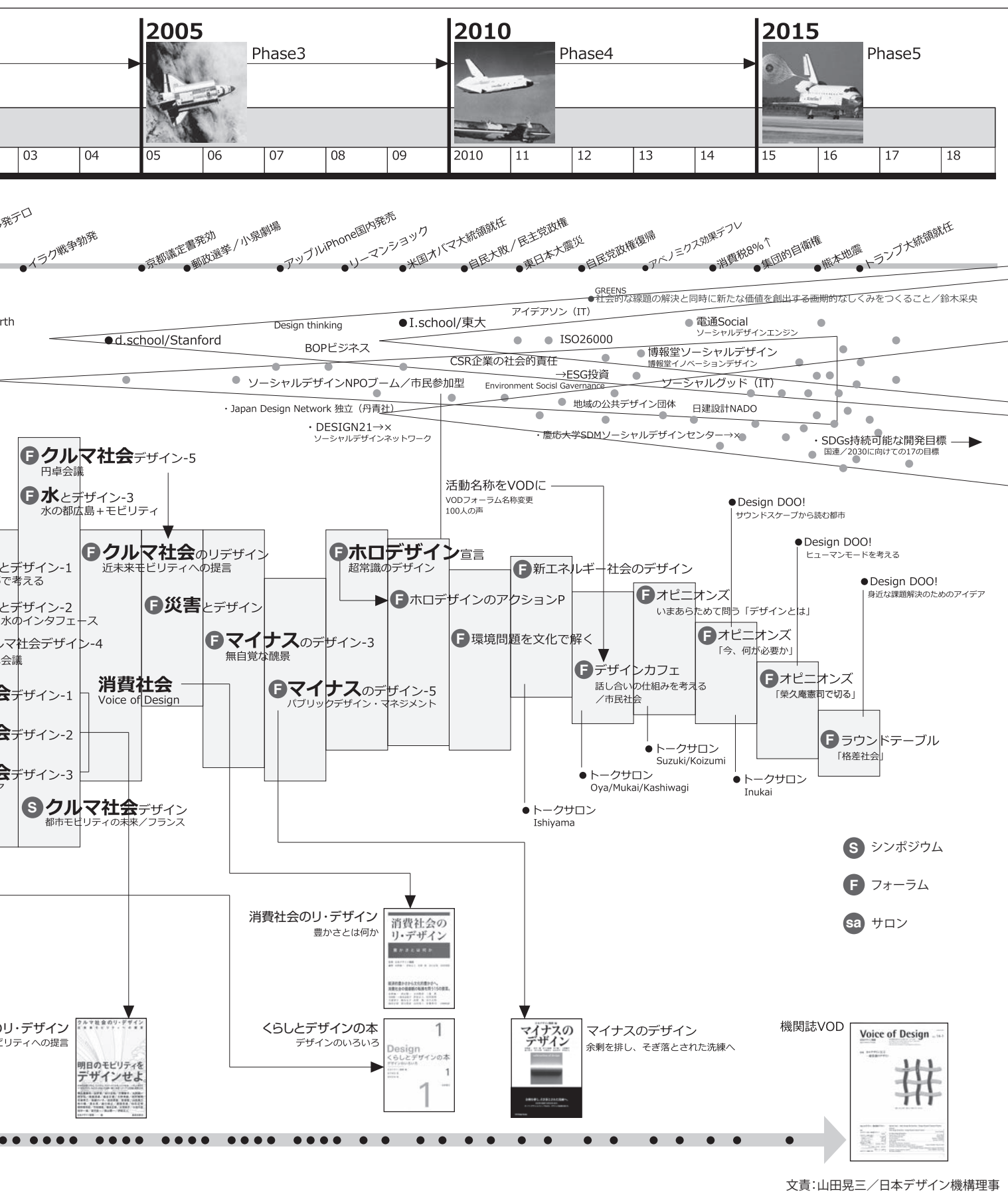
In the upper row of the chronology are happenings in Japanese society, social design movement starting around 2005, in the middle row are JD activities, and in the lowest row are JD publications.

In the year 1995, JD began its activities. The organization discussed subjects which would become issues in the future society from international perspectives, and in 1997, Japan Design declared "Social Design" to be the main theme for the organization's activities. JD reconfirmed the reason for its existence with the declaration of "holodesign" in 2008, and its activities were shifted to open forums with many participants.

日本デザイン機構の23年の歩み／テーマ別歴史年表マップ







## 寄稿

日本デザイン機構(以下JD)は、これまで多くの皆様からのご支援を受けて活動を続け、その活動の数々を本誌を通じて報告してきました。最終号を迎えるにあたって、これまで当会の活動にご協力いただいたJDの役員や会員の方々から23年に渡る活動や今後のデザインへの思いを込めた「Voice of Design」をお寄せいただきました。23年間、JDを支えていただいた皆様、ならびに、お忙しい中ご寄稿いただいた皆様に大変感謝申し上げます。

### ソーシャルデザインを束ねる主体



天内大樹

会員  
静岡文化芸術大学デザイン学部  
講師

ソーシャルデザインという言葉はたしかに人口に膾炙し、アートワールドならぬ「デザインワールド」の住人はみな一度は聞いたことがある概念になっただろう。実践している人々も大勢いる。それらをつなぐメディアもだいぶ定着している。しかしムーブメントとして拡がらないのは、「デザインワールド」の限界なのだろうか。こんがらがったこの社会にアプローチする勇気を人々に与える力がデザインにはある。元々、複雑な工学技術、複雑な社会組織にアプローチするインタフェースを人々に普及し

てきたのだから。もちろん、社会は視覚化できるほど簡単ではない。しかし社会を統制したり操縦したりする技術や組織は、その意図や有効性を明文化することなく巧緻化されている。こうした技術にインタフェースを与えることは、今世界を変革しているムーブメントの正統と呼べるだろう。

日本デザイン機構はこのたび寿命を迎えたが、これから個々のムーブメントの独自性を生かしながらその全体性を力に束ねるべきは、どんな組織形態、どんな立場なのだろうか。私の所属する静岡文化芸術大学デザイン学部は、かつて榮久庵憲司氏がその船出に参与した組織ではある。しかしソーシャルを扱う文化政策学部というもう一つの学部との協働を図り、少なくとも国内ではどの組織もなしえていない、ソーシャルデザインの教育・実践の基盤整備にこれから邁進すべきである(「以上は個人の見解であり所属する組織の公式見解ではありません」)。大学はいまや地域のアクターの一つとされているが、元々は普遍的な評価主体であり個別の利害に立ち入らなかった。今後の活動にも志は伴うが、個別の利害を超えて力として束ねる役割が社会の中に必要だとすれば、それは大学が担うべきではないか。今後のアカデミックの活動にご支援を賜ると幸いである。

### デザインへの期待



石山修武

元理事  
早稲田大学 名誉教授

2017年の暮れに、何度目かのインドからネパールへの峠越えの旅をした。2ヶ月になんなんとする旅だった。

インドからネパールへの旅は、これは今現在のアジアの中心勢力になっている中国とインドを痛切に感じさせる旅でもあった。

ネパールは両国と国境を接しているから、国境近くはそれこそ四輪、六輪、なかには八輪ものモンスター大型トラックの隊列なのであった。

岡倉天心の「東洋の理想」を想った。ようやくにして現実になっているなど実感したのである。

榮久庵憲司の『道具論』はインスピレーションに満ちた、未完の書であった。日本近代文化が西欧文化の特権の歴史を持つので、近々はアメリカの大量生産大量消費のそれに対面せざるを得なかったからわかりにくかった。

これからの中国、インドを中心とするにちがいない歴史のうねりを考えると、今、再びの「東洋の理想」の岡倉天心がよみがえり、それに連なっていた「道具論」もまた、浮上するのである。

李祖原は日本でも知られる台北101タワーの設計者である。この超高層タワーは、

### Contributions

Japan Institute of Design (JD) has conducted various programs with the support of many people, and the contents of these programs have been reported through the Voice of Design. For this final issue of the Voice of Design, past and current directors and members contributed their voices on the past activities and future design. We are very grateful to all who have supported JD for the past 23 years, and to members who have given their comments.

#### Who can Summarise Practises of Social Design?

Daiki AMANAI, JD Member / Lecturer, Faculty of Design, Shizuoka University of Art and Culture

The word "social design" became famous, and its practitioners and their media came to be established. But its movement did not expand

to the society as a whole. Design has propagated interfaces to approach engineering technologies and social organizations that tend to intrigue against the society. It remains a legitimate movement to change the world.

Our Faculty of Design, Shizuoka University of Art and Culture will have a responsibility to cooperate with another one in the University, Faculty of Cultural Policy and Management; to unite the particular powers above beyond their own interests; and to provide a basis of social design to educate and practise.

#### Expectation toward Design

Osamu ISHIYAMA, former JD Board Member / Professor Emeritus, Waseda University

I traveled through India and Nepal toward the end of 2017, and realized the presence of China and India as the major powers in Asia.



今は台湾のシンボルタワーであり、中国本土からの膨大な観光客、そして日本からの観光客で賑わっている。

李祖原には台中に中台禅寺の台湾最大の寺院の仕事があり、中国本土にも最大級の寺院の仕事がある。仰天すべき巨大スケールである。

わたくしは彼の巨大寺院の仕事に、榮久庵憲司の「道具寺」を視ている。

そのデザインは余りにもブッディストを自認するデザイン思想により、西欧文明文化世界には認められていない。榮久庵憲司とは小さな縁があったので、何とか「道具論」の進展、開花を願ったのだが、非力故にかなわなかった。

ヴォイス・オブ・デザインが継続改組するならば、やはり国際的スケールで「道具論」「道具寺」を継続発展させるのが良い。

それには李祖原を、先ず呼ぶべきであろう。デザインの未来がすでに示唆されている。(石山氏写真：K.Kanematsu)

## デザインを繋げる



車戸城二

理事  
竹中工務店 執行役員

「全てのデザインは繋がっている」このインスピレーションが、私が日本デザイン機構に参加することになった唯一無二の理由だ。

日本でも有名な、帝国ホテルの設計者、フ

ランク・ロイド・ライトは机や椅子、果てはゴミ箱まで設計したと語られる。しかし、彼が設計しようとしたのが建築ではなく環境だとすると、そこに置かれるゴミ箱まで設計するのは当然なことに見えてくる。私の専門の建築デザインだけでなく、グラフィック、工業、社会制度、そうした全てをデザインという行為で俯瞰、総合化しようとする発想は、あらゆるカテゴリーにおいて、常に細分化した上でそれぞれを深化、効率化することを成長の雛形とする、現代社会の趨勢に抗う非常に貴重な視座に思える。机上の文房具はその周りの家具や家電と調和し、それらはインテリアと、インテリアは建物、更に広がってストリートスケープ、自然の風景と繋がっていく。印象や世界観を作るこの連綿としたデザインの連続は、本来どこかで断ち切ることとはできない。デザインをグラフィックや建築、工業製品などと分けるのは生産の都合であって、ユーザーにとっては関係ない。

これら形のデザインにエネルギー、交通、安全、教育、などの制度が加わってくると更に全てのものの形やシステムは複雑に絡み、供給側の都合などで断ち切れるものではなくなる。この発想に基づくと、私達の取り巻く世界のデザインは依然として夥しい切断を抱えたままであり、デザインを繋げる発想によって私達の本来の幸福への伸び代をまだまだ持っているのではないか。

榮久庵憲司という稀代のデザイナーの作品と活動が日本デザイン機構という運動を通して、多様なインスピレーションと影響を放ち続けたが、その伸び代という希望こそ、この運動が私に示した最も価値あるものであった。

## 「日本デザイン機構」の理念は不滅



小林治人

元理事  
設景塾 塾長

「設景・造景」の概念を基礎として仕事をしていた私は、1995年7月11日設立されたJDに会設立と同時に入会しました。

JDへの入会によって、デザインの各専門分野・関連職能の共通言語として、デザインとは何か、デザインをいかに理解すべきかを常に意識し考える機会を増やすことができる場として大変ありがたい存在でした。

JDが主催する各種の催事に対し参加するたびに新鮮な刺激を受けました。特に個と全体の関係性を包括的に捉えるソーシャルデザインやホロデザインの観点から、ワークショップなどを通じて、課題認識の普及に努めている皆さんの真摯な姿に尊敬の念を抱いておりました。

現代ではデザインという語彙は広く社会に定着し、人々の衣・食・住・遊を支える環境・景観・各種生活装置などに関連して派生する問題解決のための手段として深く社会に浸透し、表層的にはデザインの意義・重要性についてある程度の社会的認識が高まったように見受けられます。

しかし、公共デザイン面では旧態依然というよりはむしろ後退しているように見受けられる場面が多いのはなぜか。特に都市

Kenji Ekuo's "Dougology" is full of inspiration, but it was a little difficult to comprehend as Japan's modern culture was too strongly inclined toward western culture. Now that China and India have come into the mainstream, Kenshin Okamura's Toyo no Riso (ideal of the East) will be revived and followed by "Dougology." If the "Voice of Design" was to be continued in some way, I would recommend that Dougology and Dougu Temple be evolved on an international basis.

### Linking Design

Joji KURUMADO, JD Board Member / Executive Managing Officers, Takenaka Corporation

"All types of design are linked." This inspiration was the one and only reason for me to join the Japan Institute of Design. The idea of looking over and syncretizing not only architectural design, my

specialty, but also other design genres such as graphic, industrial and social systems by the act of designing appears to be a precious viewpoint against the contemporary trend in all design categories to consider segmentation, deepening specialties, and seeking efficiency are the model for growth.

Looking through the lens of this concept, it seems that the world is still overflowing with countless numbers of disconnected designs. With the concept of linking designs, we may show greater potential for our future happy life. The hope of potential growth is the greatest value that the Japan Institute of Design movement has presented to me.

### The Ideal of the Japan Institute of Design is Imperishable

Haruto KOBAYASHI, former JD Board Member / Principal, Sekkeijyuku

Today, the term design is widely understood as a means to solve

生活の安全・安心・居心地が良いといわれる都市の整備にあたって、美を基準とした将来ビジョン、街にかくされている生活レベルの情報を計画面で把握し新しい価値観を生み出すために、23年間にわたって検討されたJDの研究成果を組織が解散しても会員各位のデザイン現場において応用・実践していくことが重要であると考えています。榮久庵憲司先生の先導で設立されたJD活動の大きな波紋は、次の時代へデザイン現場を通じて確実につながっていくと確信しています。関係者の皆様に心から敬意を表し感謝の念をささげる次第です。

## 日本デザイン機構解散によせて



迫田幸雄

元理事  
家事見習

日本デザイン機構を23年間支えてきたのは伊坂正人さんただ1人です。足が少し不自由になられて、この機構を推進するについて幾らかもどかしくなられ、ご無念であったのではとお察ししますが、もう充分に活躍なされたと思います。また、JDの創立者であり、人的シンボルであった榮久庵憲司さんが亡くなられたのち、「デザイン」の理想を引き継ぐ、納得のゆく中心人物が見つからなかったここ数年であったことと、運営を担う重鎮の方々の熱い思いと実践の乖離が少しずつ広がったことが、JDの

活力を削いだのではないのでしょうか。では「デザインの理想」とはと問われても、私はウツと詰まって、それを探しにこの会に入らせていただきましたと逃げるでしょう。理念とか構想とかいわれても、私の中では抽象的すぎて、考えているうちに妄想となってしまうのです。

インダストリアルデザインを目指し、いまもインダストリアルデザイナーのつもりでおりますが、心に在る思いは「デザインは色・形に責任を持つ」であります。このことは、伊坂さんにVoice of Design誌編集委員の1人に引き上げていただき、さまざまな幅広いテーマでの取材・編集のお手伝いをさせていただいて強く気づきました。これが最も得がたい経験でした。いまや保険の名にも学生が就職先をどう選ぶかの学問？の名にも、色々な名詞のあとさきに「デザイン」と付くモノ、コト、分野などなどがあふれ返っています。しかし、半世紀前に「デザイン」をこころざし今も学ぶ私にとって、人のいう「狭義」のデザインを謙虚に究めたいという思いをさらに強くしてくれたのも日本デザイン機構でした。

解散の報に接し、やんぬるかな、残念な気持ちにはなれません。私は2年前に自分の能力のなさに嫌気して勝手に退会逃亡した身ですから、何をか言わんやですが。伊坂さん、南條さんごめんなさい。

## もっと広げたい「デザイナー」



佐藤典司

理事  
立命館大学経営学部 教授

大学でデザインマネジメントを教えるようになって20年近くになるが、この間、私の周辺でのもっとも大きな変化は、デザインを色やカタチといった表現中心で捉えることから、もっと広い、抽象的な意味合いでそれが捉えられるようになったことだ。別の言い方をすれば、デザインはデザイナーたちだけの占有物ではなく、その周辺で働く人々の間でも語られ、使われる言葉となったと言ってよい。

それはクルマで言えば、個々のクルマの色や形をデザインするだけでなく、クルマとクルマ、クルマと人、クルマと街、クルマと地球の関係を考え、それらすべてをデザインすることが、デザインという言葉のフィールドとなったということだ。

こうしたことは、当のデザイナーはもちろんのこと、もろもろの要素間の関係を考え、そこから新たな価値を生み出す仕事に携わっている人たちにとっては、すでに当たり前のデザイン観になっていると言ってよい。

ただ、デザイナーという言葉が、世間一般では相変わらず表現者だけを表す言葉として捉えられているように、社会全体としてのデザイン観は、いまだ周回遅れの状態にある

problems of environments, landscapes, equipment for living to support people's clothing, food, housing, leisure and so on, and the importance of design has been recognized to some extent. However, public designs are not yet praiseworthy. In order to draw a future vision of cities based on beauty, the results of studies by JD in the past 23 years should be applied and practiced to obtain latent information on living in a town, and to create new values to redevelop cities with enhanced safety and comfort.

### Pursuing My Own Design

Yukio SAKODA, former JD Board Member / Student of Housework

I joined JD to try to discover what ideal design would be. I wanted to become an industrial designer. Even today, I think I am working as an industrial designer. What I bear in mind is that "a designer should be responsible to colors and forms." I realized this fact strongly after I

was appointed to be a member of the editorial team of the Voice of Design. It gave me valuable experience to interview people and to visit various places to gather information for articles. The term "design" is now widely used, even when concerning insurance schemes, college faculties, and so on. For me, it was JD which encouraged me to humbly pursue my way to master the "narrow sense of design."

### More "Designers" Wanted

Noriji SATO, JD Board Member / Professor, College of Business Administration, Ritsumeikan University

I have taught design management at a university for nearly 20 years. The greatest change around me during this period is that design has come to be understood with more abstract meaning rather than only expressions with colors and forms.

と言ってよい。例えば、クルマと地球の関係を考える仕事にたずさわる人たちを、世間がデザイナーと呼ぶことはまずない。

赤い色と青い色の組み合わせから新たな価値を生み出すデザイナーがいるのなら、地上を疾駆するクルマと、まわりの景観や地球環境との関係性から生まれる価値について考えるデザイナーがいても、少しもおかしくないだろう。

とくに日本のような先進国において、種々の価値要素が成熟し切った今日、自然と人工物の森羅万象の要素の組み合わせから生み出される新しい価値をデザインする「デザイナー」こそ、その出現が待望されていると言ってよい。デザイナーという言葉、狭い枠のままに閉じ込めておかないこと。それがデザイン振興の一番の近道だと考えている。

## バブル崩壊とIT革命



佐野寛

元理事  
スタジオ・エス 代表取締役

2000年に「私は渋谷で異様なものを見た。携帯電話を持った人たちが、みんな黙って携帯電話を見ているのだ。これは何かが起こるかも知れない」と、アメリカのIT研究者H・ラインゴールドは書いている(NTT出版)。IT革命先進国であるアメリカの研究者がそう書いてから数年で「1年ひと昔」

が始まった。

グラフィック系初の審査員として最初の榮久庵会長主催の理事会時、理事の大宅さん、犬養さんなど、デザイン専門家らしからぬ人たちの発言に感銘した。そして冒頭に引いた言葉。両者は、私がやっていた集英社『イミダス』の「広告・宣伝」の項の「レビュー」の参考になっていた。

私が東京学芸大学の教授になったのは1989年だが、その翌年、いわゆるバブル経済が弾けた。そして世の中は、IT革命の時代に入った。IT革命の本質は、驚異的演算能力を持ったチップにある。それが、スマホを通じて広告を変えた。一対多をあらゆる消費者のモノにして、情報を交換しあう。あのNHKまでが、閲覧数でニュースの順位を決めるまでになった。消費者調査が主役になった。大手広告代理店が、調査権を握った。無名の閲覧者たちが経済の主役になった。

デザインも変わった。デザインもビッグデータの支配下に入った。巨大数の閲覧が集まった時、それは、誰をも打ち倒す力を得る。人間対ロボットも同じだ。人間は労働からも追われ、消費者としてしか、生きられなくなった。人間的なデザインの力は、雲散霧消した。日本デザイン機構の解散は、残念至極だが、仕方がない。嗚呼。

南條さん、誠実無比の伊坂さん、水野会長他のみなさん、本当にご苦労様でした。有難う。

## 社会運動としてのデザイン



田中一雄

会員  
GKデザイン機構 代表取締役社長  
/CEO

「デザインは社会運動である！」これは、日本デザイン機構設立を提唱した榮久庵憲司の終生変わらぬ思いであったに違いない。

榮久庵憲司は東京藝術大学在学中に、小池岩太郎門下生としてGroup of Koikeを組織し、以来デザインに生涯をささげた。後のGK Design Groupの始まりである。その活動方針の根幹に、「三翼回転構造」がある。三翼とは「運動」「事業」「研究」を意味する。その中でも、「運動」を第一義とした。「運動」とは、デザインを啓蒙しインダストリアルデザイナーの職能を確立することに始まり、より良い社会の到来を願うものであった。三翼構造は、この社会への願いを「事業」というカタチを通じて具現化し、それを、「研究」行為を通じて再び客観化し、社会との共通言語を持つというものであった。こうした、循環を繰り返すことによって、デザインによる社会改革を推進しようとしたのである。その思いは、バウハウス運動にも通じるものであった。

日本デザイン機構は、このような榮久庵憲司思想によって生み出されたと言っても過言ではあるまい。今日、世界のデザイン潮流は、デザインによって様々な社会課題を解決することを目指している。その動き

This understanding of design is now shared by designers and people who are engaged in work that considers the interrelationships of various elements, both tangible and not, and to create new values. In industrialized countries like Japan, where value elements in all fields of life are mature, designers who will design new values by combining nature and man-made things are awaited.

## IT Revolution

Hiroshi SANO, former JD Board Member / President, Studio S

After the collapse of the "bubble economy," the IT Revolution began with the development of highly capable computer chips. They changed CMs through smart phones, and individuals obtained a convenient way to communicate with many people. TV stations refer to the number of accesses in deciding the order of headline news. Consumer surveys became the main factor for business decisions. As

robots replace humans, and humans are increasingly pushed out of the labor force to live only as consumers, design has also changed, and is now under the control of Big Data. The power of humanly generated design disperses like a mist. Although regrettable, the dissolution of JD cannot be helped.

## Design as a Social Movement

Kazuo TANAKA, JD Member / President, CEO, GK Design Group

"Design is a social movement." This must have been a lifelong thought of JD founder Kenji Ekuan. Now the trend in the world of design is to work to solve social challenges through design. Ekuan proposed the establishment of the Design for the World (DW), an international umbrella organization based in Spain which has exerted great influence on latter design movements. Ekuan laid the foundation for changes in international design organizations.



の源流にも榮久庵憲司思想は存在する。榮久庵によって提唱され、日本デザイン機構の上位国際組織としてスペインに設立されたDesign for the World (DW)は、後の国際デザイン運動に大きな影響を与えた。近年 icsidはWorld Design Organization (WDO)に、そしてicogradaはInternational Council of Design (ico-D)へと名前を変えた。いずれも、従来の専門性に捉われず、「デザインによる、より良い社会の実現」を目指してのことである。国際デザイン運動の父とも言える榮久庵は、これらの変革の原点を築いたのだ。生前、榮久庵は私に「デザインと国連を繋げ!」と叱咤激励した。そして今、WDOは国連が提唱するSDGs(持続可能な開発目標)をデザインによって実現していこうとしている。

時代は移った。デザインによるソーシャルイシューの解決が社会常識となる中、日本デザイン機構は、その役割を終える。しかし、榮久庵によって提唱された「社会運動としてのデザイン」は、しっかりと私たちの中に根をおろしている。

## ライフデザインの選択にむかって



谷口正和

理事  
ジャパンライフデザインシステムズ  
代表取締役社長

日本デザイン機構は、これまでソーシャルデザインによる社会課題の解決と未来に

向けた生活文化の創造を目的に、榮久庵憲司先生を中心に活動趣旨に賛同した社会学としてデザインに興味のある学者や実務家、クリエイターたちによって設立され、変革の使者として日本社会に様々な提言を行ってきました。それから、23年の月日が経過し、機構としての役割が問い直されています。

デザインの役割は、社会のあり方としての「デザイン構想」の整理から、個人の生き方としての「デザイン思考」の応用へと移行しています。それを象徴するキーワードがライフデザイン。つまり、「人はどのように生きるのか」という長寿社会の課題、個人主体の認識が求められるようになりました。

個人の生き方としてのデザインは、自らの存在価値に気づいた個人に対して、どのような生き方を選択するのかという「問い」と、どのような形で存在価値を社会化していくのかという「答え」の両方を導き出すこととなります。この変化に対応するため、デザインのあり方も従来の他者から役割が与えられるトップダウン型ではなく、個人の多様性を内包しながら自発的に役割を見出し、価値を築き上げていくボトムアップ型へと転換し、更に視点の高低を往復しての思考の深まりを求めていく姿が問われるようになりました。

JDの設立意図であった「ソーシャルデザインによる社会課題の発見と解決のシナリオ研究」は、23年という成立以後の時間を経て、それなりの成果を見ることができたのではないかと考えています。そして、今は新たな未来を再構想する時期に差し掛かっています。

ゼロ・ベースシンキングを、ネクストチーム、ネクストジェネレーションにバトンタッチし、リベラルアーツが問われる次のステージに期待します。

## 産業革命4と デザインの日本的家族関係



田村国昭

元理事  
田村インサイト 主宰

産業革命4の進展によって、2045年、人類は、その全領域で、AIに王者の座を明け渡すとされる(シンギュラリティ)。一方で、日本の経済、金融、モノづくり、暮らしの基盤は崩落状態に陥ることになろう。(東京オリンピック後)デザインどころの話ではない。

その元凶は、アホノミクスと揶揄される日銀、財務省、厚生労働省による日本株の大量購入と中・長期債務1045兆円という重圧である。森友/加計の不正隠し、階級的格差の定着、なかんずく2千万人の下層階級と最悪の生活保護世帯と不正申請。それ以上に輪をかける劣化が、モノづくり現場の不正、隠蔽、過労死。東芝、神戸製鋼、富士フイルム、日産、電通等ブランド企業の不祥事は日常茶飯事となってしまった。留まることを知らない教育現場のいじめ、家庭内の虐待、京都大学iPS細胞研究所、理化学研究所による捏造論文など、不義大國と墮したニッポンは、今後、人口急減、地

JD has completed its role now, as working to solve social issues through design is taken for granted. Ekuan's "design is a social movement" has firmly taken root in our minds.

### Selection of Life Designs

Masakazu TANIGUCHI, JD Board Member / President, Japan Life Design Systems Co., LTD.

The focus of Design today is shifting from "Design Concepts" intending to build a better society to that of applying "Design Thinking" to individual lifestyles. The representative issue is "how people should live" in the society of aged population. Individual-centered thinking is now required. Every person should find their purpose and enhance their self-value in life.

Through its 23 years of existence, I am certain that JD's goal "to study scenarios to identify social issues and their solutions through social

design" has witnessed positive results. I hope that the study will be handed on to the activities by our next generation.

### Industrial Revolution IV and Japanese-type Family Relations in Design

Kuniaki TAMURA, former JD Board Member / President, Tamura Insight

Because of the advancement of the 4th industrial revolution in the world, all jobs might surrender to artificial intelligence (AI) by 2045. By then, the economy, financial market, manufacturing industries, infrastructure for people's living in Japan might collapse. Japan would decline due to a rapid decline in population, earthquakes and other natural disasters, the planned resumption of nuclear power stations, and the belated process of the 4th industrial revolution in the country. It is urgent that we organize databases, study liberal arts

震・自然災害、原発再開の愚、周回遅れの産業革命4もあって、転落一途となろう。

急務は、データベースの構築、リベラルアーツの再履修、日本の家族的、自然主義によるデザイン哲学の確立でしょう。好例が、建築でいえば藤森照信、モノづくりでいえば一澤帆布、文学でいえばカズオ・イシグロ、地域開発でいえば石見銀山、産業革命4では日立、パナソニック、経営者でいえば日本電産・永守重信、歴史文化でいえば光悦、良寛、常一、地理的には京都、奈良、石川、九州、東北、高山、瀬戸内。データベースとしての資産が残されている。水と森がある。日本的家族主義が色濃く残っている。

以上を包括し、日本のデザインのデータベース化による産業革命4対応については、感性イノベーション研究推進機構長、マツダ技監の農沢隆秀、登場必須でしょう。

## 「これからのデザイン」をめぐる



鳥越けい子

理事  
青山学院大学総合文化政策学部  
教授

私にとってJDは、デザインという言葉とその活動の本質の意味を探る場であり、その内容を現実の社会で仲間たちと共に実践・展開する現場でもありました。JD内外の多くの人たちと出会い、ディープに話し合い、機関誌の構成を検討したり取材に出

かけたり、ときにワークショップの現場をつくったり…そこには常にクリエイティブな精神と実践、「これからのデザイン」をめぐる真摯な議論がありました。

JDのプロジェクト「こどものためのデザインの本」の担当も、そうした活動のひとつでした。全体を3巻構成とし、シリーズのタイトルを「くらしとデザインの本」に決定するまでも多くの議論が必要でしたが、『デザインのいろいろ』（第1巻／金子修也著）、『デザインの現場から』（第2巻／伊坂正人・佐藤聖徳著）に続く第3巻『これからのデザイン』執筆のため、私は共著者の佐藤典司さん、南條あゆみさんとさまざまな調査や検討を重ねました。

2009年に出版されたその本が、社会的にも高く評価されたとき、私は研究テーマの「サウンドスケープ(音の風景)」を介すことなく、デザインそのものを論じることが自分の課題のひとつであると認識しました。

一方、昨年(2017)末、私にとっては幼い頃からの音の原風景の一部だった自宅そばの屋敷林が、その姿と声を完全に消しました。近所の一部の人たちとは数年前から、イギリスのナショナルトラストのようなしくみをつくれるといいのに…などと話していた最中のことでした。ソーシャルデザインを提唱しても、その実現までの道のりの険しさを痛感するこの頃です。

『これからのデザイン』の内容を踏まえた「大人のための本」をつくりたいという、JDとしては叶わなかった計画を今後、何らかの形で実現させたい。私自身のデザイン活動のこれからにおいても新たな一歩を踏み出したい、と思わずにはいられません。

## 「Voice of Design」の由来と変遷、そして託された夢



藤本清春

監事  
GKデザイン機構 監査役

「Voice of Design」という言葉が初めて世界に公表されたのは、1973年10月の京都。故築久庵会長が実行委員長を務めた「ICSID '73 Kyoto」の会場であった。集まった38か国、総勢2245名の参加者は、その独特な仕掛けに驚いた。それは会期中設置されたFMサテライト局「Voice of Design」の存在であった。会議情報をリアルタイムで放送する小さな放送局であった。

そもそも、この発想は、故築久庵会長が海軍兵学校時代に耳にしたアメリカ軍の宣伝放送「Voice of America」に由来する。「鬼畜米英時代」の放送ながら「アメリカの声」という名の下、国民の意志をまとめ、国威を発揚する姿勢には大変承服したのだと云う。そして終戦後の「デザインを通じて生活の復元と進展を求める強い意志」は、東京藝術大学時代の「デザインレポート運動」から、GK創立後の各種「デザイン運動」へと続く事となる。その間、常に心中で温めていた言葉が「Voice of Design」であった。

後にGK内に「株式会社ボイス・オブ・デザイン」が設立され、デザイン振興事業を試みるが、採算の域に至らず会社として収束を行う。しかし、その固い意志と想いは、

again, and establish design philosophy based on family-based naturalism, which we fortunately maintain. I place expectations on innovation with sensibility and emotion.

### “Design from Now”

Keiko TORIGOE, JD Board Member / Professor, School of Culture & Creative Studies, Aoyama Gakuin University

For me, JD has been the place to explore the essential meaning of design and design activities, as well as to develop and put ideas into practice in collaboration with colleagues. I had opportunities to meet with people inside and outside of JD and to discuss various issues deeply with these people. As an editor for Voice of Design, I was fortunate to interview a variety of people for articles I have written, and to organize workshops. Behind the scenes of these respective activities, there has always been a creative spirit and numerous sincere

and heated discussions.

Even though we advocate Social Design, I had to experience the difficulties involved to realizing a plan. I hope I can move forward with promoting my own design activities.

### Debut and Changes of “Voice of Design” and Dreams for the Future

Kiyoharu FUJIMOTO, JD Inspector / Auditor, GK Design Group

It was at “ICSID '73 Kyoto” that “Voice of Design” was announced. It was an FM satellite radio station established during the large-scale international conference.

The term was inspired by “Voice of America,” a radio station that Kenji Ekuan had listened to as a student at the Naval Academy. He was deeply impressed by the ability of the United States to unite the nation and enhance national prestige under “Voice of America.”

同時期活動していた「日本のデザインを考える会」の有志達により「日本デザイン機構」へと引き継がれた。

「Voice of Design」の由来から変遷、そして未来への様々な想いを辿ると、改めて地球上を行き交うデザインの声に、常に耳を傾けて行かねばならぬことを再確認する。今後の「Voice of Design」の新たな進化と発展に期待して止まない。



## デザインと社会のつながりを 教えてくれた



森口将之

理事  
モビリティ代表取締役

まずは日本デザイン機構に感謝したい。デザインについて無知に近かった私を会員として迎え入れ、デザインの見方・考え方を教えてくれたからである。

入会した2004年には、「クルマ社会のデ

ザイン」というテーマでフォーラムの開催や書籍の編集などを進めていたと記憶している。モータージャーナリストということでも声が掛かったようだが、他のメンバーはほとんどがデザインのプロフェッショナル。専門性の高い議論についていけるか不安があった。

ところが入会してみると、第一線で活躍するさまざまな分野のデザイナーたちと対等に近い立場で情報交換できることに驚かされた。昨今IT業界などが導入しているプラットフォーム型を思わせる組織形態が、この時代に実現していたと言えるかもしれない。まもなく若手メンバーが中心になって「マイナスのデザイン」というテーマを進めていく機会が与えられるなど、自由闊達な気風にも好感を抱いた。

こうした状況の中で自分なりにデザインに向き合い続けた結果、2013年からはグッドデザイン賞の審査委員を4度務めることになっている。14年前に事務局に声を掛けられていなかったら、こうした経験には出会えなかっただろう。

モビリティの分野では現在、自動運転やコネクテッドカーなどの次世代技術を筆頭に、社会との関わりが重要になりつつある。日本デザイン機構が当初よりソーシャルデザインという考え方を掲げ、クルマ社会のデザインに目を向けた先見性に改めて感心するし、私自身これらのテーマに取り組むうえで大変役に立っている。

日本デザイン機構という組織には終止符が打たれるが、ここで育まれた思想はむしろ、今後さまざまな分野で重要になっていくと感じている。10年以上にわたりこの組

織に身を置くことができたのは、それを思うに掛け替えのない体験だった。

## 日本デザイン機構で学んだこと



矢後真由美

会員  
Teable 代表取締役

メンバーとなって、8年が経とうとしています。私はほんの後の方しか在籍できませんでしたが、多くのことを学ぶことができました。大学を卒業しても、学びの場があったことはありがたいことでした。今回、JDが一区切りを迎えるとのことで、学んだことをまとめました。

### ①デザインという考え方の価値

学生だった頃、デザインには、今ある問題を解決するソリューション型と、新しい価値を生み出すクリエイション型があるときいていました。しかし、学生でなくなっからは、何か解決する方法はないか？新しい価値を創れないか？と考える機会を失っていたと思います。そんなとき、JDがデザインという考え方を改めて教えてくれました。身の周りのちょっとしたことに目を向け、そこからアイデアをめぐらせるような活動が、仕事や地域貢献につながっていることはまちがいありません。

### ②目線を変えてみることの価値

JDをとおして、いろんな目線で物事を見る機会をいただくことができました。あると

After having established the GK Design Group, he founded the Japan Institute of Design together with like-minded people. Then, he revived his long cherished "Voice of Design" as its nickname. Now I realize the necessity for listening to the voice of design.

## JD Taught me the Linkage between Design and Society Masayuki MORIGUCHI, JD Board Member / CEO, MOBILICITY Co., Ltd.

I joined JD 14 years ago as a motorcar journalist, a complete stranger to design. But when I attended a meeting, I was surprised to find that I could exchange views with designers in various fields of design on equal standing. The platform-type organization, which is becoming common today was already established there.

JD presented the concept of Social Design in its earlier days, and directed its focus to the design of the motorized society. I am amazed

with its foresightedness considering recent developments in the automobile industry. Having been a JD member for over a decade was a precious experience for me.

## What I learned from JD

Mayumi YAGO, JD Member / Managing Director, Teable Co.,Ltd.

I learned the following from JD in my 8-years as a member.

- 1) While being occupied by my work with no chance to think about ways to solve a problem or to create a new value, JD taught me the idea of design thinking. Looking around to pick up an issue to work with to improve the situation helps me with my work and activities.
- 2) JD gave me opportunities to look at things from others' viewpoints. This stimulated my own thinking and helped me to think of new ideas.
- 3) I had opportunities to learn others' views of the world by working with many specialists.



きは外国人の目線ではとバスツアーに参加したり、そしてあるとき観光客の目線で商店街を歩いてみたり。目線を変えて体験することで、このサービスのここに価値があるんだとか、こんなサービスあったらいいじゃないとか、たくさんの気づきやアイデアが生まれてきます。

### ③世界感を楽しむことの価値

JDでは、いろんな方々と活動を共にしました。みなさんそれぞれの分野でのスペシャリスト。そんなスペシャルな方々と交流を持てたことの価値は計りしれません。彼らの考え方や世界感を垣間見る瞬間、今までみたこともない世界に魅力を感じ、自分自身の世界感も広がるのを体験しました。

今後は日本デザイン機構で学んだことを活かしてのデザイン・事業展開を目指していきたいと思います。

## 継承したい「運動」の精神



山田晃三

理事  
GKデザイン機構 取締役相談役

23年間は長過ぎたのではないか。社会に対するデザインの「運動体」としては…である。20世紀初頭、ドイツに誕生したバウハウスはわずか14年という短命であった。合理と表現主義の混沌から「機能主義」という新たな思想を展開した、デザインの「運動体」であった。強烈な運動のエネルギーは

発起する人々の意志であり、イメージが社会を動かす。運動体の寿命はエネルギーの大きさと反比例する。

日本デザイン機構は「運動体」としてスタートした。バブル経済のなかで専門特化した職業デザイナーではもはや社会の問題解決は不可能だと予見し、さまざまな学際的連携から「ソーシャルデザイン」という旗印を立てた。おりしも経済の崩壊、阪神淡路の大震災、サリン事件など社会は混沌に向かおうとしていた。1995年の設立からの10年間、JDの活動には眼を見張るものがある。災害、教育、交通、消費、医療、水環境、そして国際貢献と、今日デザインの名のもとで議論されねばならないテーマを俎上にあげ、提言は活発だった。社会が「ソーシャルデザイン」を捉えはじめたのはそのずっと後である。

デザインは、そもそも「総合的」な思考を持った創造領域である。JDはこのことを世に問うた。世間に正しいデザインの立場を訴えようとした。いまソーシャルな視点や新しいデザインの思考法がこれを支持してはいるが、デザインという言葉は、いかにせん巷ではアート、感性の域をでておらず表層的である（誤解なきよう：優れたアートは社会を動かします）。新たなビジネスを展開するにしても、社会の価値観が変容しようとも、デザインの本質を語る「運動」の精神は、いつの時代も必要不可欠だと知った。JDは解散しても、創始者、榮久庵憲司氏への志を継ぐ「運動」の精神は、デザインの使命において、自身において継続せねばならないと心している。

I will make the best use of my findings in my future work.

## The Spirits of the "Movement" to be Succeeded

Kozo YAMADA, JD Board Member / Executive Director, Adviser, GK Design Group

Japan Institute of Design was founded as a movement. Foreseeing that contemporary professional designers who were specialized in narrow ranges of work would not be able to solve growing social issues, JD hoisted the banner of Social Design to promote interdisciplinary cooperation.

Design is a field of creation requiring "comprehensive" thinking, and JD has tried to spread this real concept of design. I trust that the spirit of our movement to convey the essence of design is indispensable in any time. The movement succeeding the spirit of the founder, Kenji Ekuan must continue.

## おわりに

### 新たな活動ステージへの移行にあたって



佐々木歳郎

日本デザイン機構 事務局長  
SMART Republic Inc. 代表

「ソーシャルデザインによる社会課題の発掘と解決に向けた視点を提供する」という日本デザイン機構の活動は、23年という年月を経て新たな活動ステージへ移行します。機構にとっての重要な節目の年に事務局長を担わせて頂いていることに深い感慨を覚えると共に、新たな活動に向けた再スタートに大きな責任を感じています。

機関誌『VOICE OF DESIGN』の発行やフォーラム、シンポジウムの開催、俯瞰的なテーマによる出版物の刊行等、さまざまな活動をととして社会に多くの気づきをもたらされ、ソーシャルデザインという視点が広く共有されるに至ったことはデザイン機構の最も大きな成果と言えると思います。

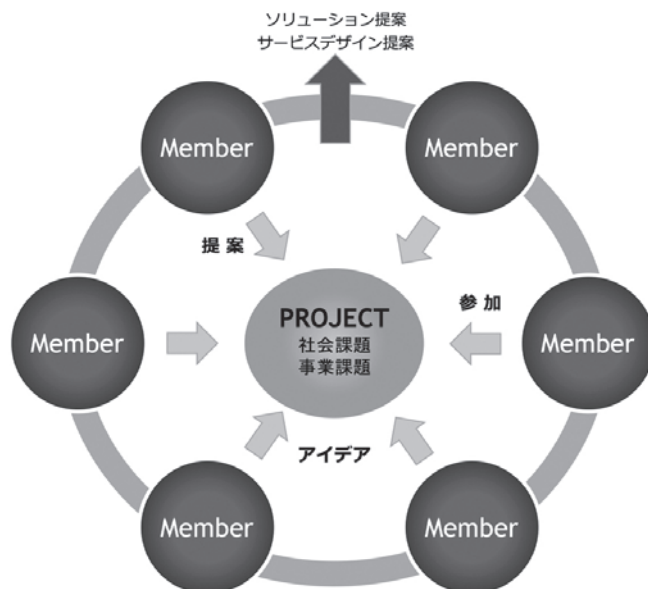
一方、現在、社会価値が多様化し様々なシステムの制度疲労が顕在化すると共に、人口減少と高齢化という深刻な社会問題を抱える大きな時代の転換期にあって、ダイバーシティ、サステナビリティを基本価値としつつ、社会課題解決にむけたより具体的な方法論やアイデア、ソリューションが求められており、こうした社会の要請に応じて新たな時代に向けた未来志向のソリューション事業を担う活動としてデザイン機構を発展的に再スタートさせることは、デザイン機構のDNAにふさわしいものであると考えています。

新たな活動は、「未来シナリオのデザイン」を基本コンセプトに、多彩な分野メンバーによる横断的な視点とノウハウ等を活用した、プロジェクトベースのファーム組織を想定しています。

引き続き多くの皆様のご参加、ご協力、ご声援を宜しくお願い致します。

## The Virtual Organization プロジェクトごとのチーム編成

新活動フレーム案



#### ミッション

- 次代に向けた社会システムデザイン提案
- 社会課題の解決プロジェクト
- 将来世代の活動ステージ提供

#### Project Style

- メンバーのアイデア/提案を事業化
- 参加希望者によるチーム編成
- 外部依頼/課題のプロジェクト化

## On Closing

### Moving into a New Stage of Activity

Toshio SASAKI, JD Secretary General / SMART Republic Inc.

After 23 years of existence, the activity of the Japan Institute of Design (JD) aimed at "proposing a perspective to identify and solve social issues through social design" is going to take a step forward to a new stage after 23 years of its existence. Being Secretary General of the organization at such an important point, I feel a deep emotion and great responsibility for starting new activities.

The greatest achievement of JD is that Social Design has come to be widely shared in society. Through its wide range of activities such as organization of symposiums, publication of the Voice of Design, and other books on themes from comprehensive viewpoints, JD fostered greater social dialogue on Social Design.

Today, when values are increasingly diversified and the fatigue in social systems is clear, we are faced with serious challenges of population aging and population decline. At this transitional time, more concrete ideas, methods and solutions to meet these challenges considering diversity and sustainability as the basic values are demanded. It is appropriate for JD to re-start its activities to respond to the social request and to offer future-oriented solutions to social issues.

New activities should consider "design of a future scenario" as the basic concept, and function as a project-based group mobilizing interdisciplinary expertise and viewpoints.

I would like to request participation, cooperation and support by many people.



**編集後記** 私が日本デザイン機構事務局を尋ねたのは、国際シンポジウム「Design for the World 東京」を間近に控えた1999年2月のことです。恩師であった故・佐野邦雄先生のお導きによるものでした。以来、設立時から尽力されてきた小木花子さんから引き継いで、事務局を担当してきました。

当時、ソーシャルデザインはまだ一般的ではありませんでした。しかし、さまざまな専門家による議論や事務局に寄せられるご意見には、ソーシャルデザインという運動の必要性を感じさせる力強さがありました。そうした声—Voice of Designを本誌などを通じて発信してきましたが、こうして振り返ると、皆様とのやりとりの一つひとつが感慨深く思い出されてきます。これまで、当会活動にご支援・ご協力いただきました皆様に心より感謝申し上げます。(南條あゆみ)

**Editor's Note** In this issue, the activities of the Japan Institute of Design over its 23-year history are archived together with comments by members on the future of design.

When the organization was established, Social Design was not yet well recognized in society. But discussions by specialists in various fields, and opinions delivered to our office vigorously suggested the need for a movement advocating social design.

Looking back upon the history of the organization, I feel that conversations among members are recalled with deep emotions. I would like to extend my hearty gratitude to those who have supported and cooperated with JD activities. (Ayumi Nanjo)

『VOICE OF DESIGN』は全62号をホームページで閲覧できます。  
All 62 issues of "Voice of Design" can be reviewed in our website.  
URL: <https://voice-of-design.com/journal/>



本『VOICE OF DESIGN 最終号』は日本デザイン機構の23年間にわたる活動の軌跡と  
会員、元会員からのこの活動に対するご意見や今後のデザインへの期待をまとめたものです。

This "Voice of Design final issue" contains the trace of activities of the Japan Institute of Design for the past 23 years  
and comments on these activities and expectations to future design by present and former members.

VOICE OF DESIGN 最終号 2018年3月31日発行

発行人／水野誠一

編集委員／山田晃三(委員長)、伊坂正人、佐々木歳郎、鳥越けい子、藤本清春

矢後真由美、西山誠、南條あゆみ(事務局)

翻訳／林千根、天内大樹

発行所／日本デザイン機構事務局

〒171-0033 東京都豊島区高田3-30-14山愛ビル2F

印刷所／株式会社高山

VOICE OF DESIGN final Issued: March. 31. 2018

Published by Japan Institute of Design 3-30-14 Takada, Toshima-ku, Tokyo 171-0033 Japan

E-mail: info\_jd@voice-of-design.com

Publisher: Seiichi MIZUNO / Chief Editor: Kozo YAMADA / Translator: Chine HAYASHI, Daiki AMANAI

Printed by Takayama inc.